

つたのみ日記 (3)

—ロープウェイ—



坂元彦太郎

世界で二番目に長いといわれるロープウェイにのった。私の次男が勤めている電機会社が動力装置をつくつたのだという彼の自慢を实地に見てみるという気持ちもあって、箱根で文部省の仕事で「かんづめ」になっているひまを盗んで、空中を往復した。

十人乗りのゴンドラによく乗せてもらって、座席がさだまると間もなく、ごつんとゴンドラの支えが軌道にはまると、ベルがなって、すうっと動きだす。これが、うちのこどもの自慢の起動装置だろうが、やはり、少しばかりの衝動を感じる。

相乗りをしている新婚の夫婦が、こわいとか、こわくないとか、やさしい声でいい合いを楽しんでいるのを、聞くとなしに聞いている私も、自分がこわがっているかどうか、意識の焦点を向けて見た。

早春とはいえ、二、三日前に降った雪が

あちこちに残っている。やわらかい生ぶ毛のようなこまかな枝を指のようにさしあげている落葉樹の名はわからない。しかし、その、暖かい土色系のむらさきの感じが、もうすぐめぐみはじめるいぶきを感じさせている。

地上百メートルのゴンドラの中で、私は考えて見た。もし、何かがあるとすれば、ごとんと始動してすぐ宙つりになったときに、ばくぜんと不安の気持ちがあったよつた。そして、すぐ外の下側に眼をやるところ、わくなるのだらうな、と思つてその通りにしたが、そう思つて見たせいか、恐怖心というほどのものではない。上を見ると、ごんどうの上の方がくるりとまがって、太いロープにしっかりと支えられて動いている。「あそこがはずれたら、あぶないのね」とおよめさんが分り切ったことをいう。そ

う聞くと、かえって私の胸は定まってしまう。だから、あそこがはずれないようにちゃんと出来ているはずだ——こう思つて、ゆつたりとまわりを見まわした。

はじめての境地に、はじめての仕事に自分でするときの不安もまた、このようなものか知ら——すつかり、その仕事に身をまかせ、一本の太い軌道に身を投げこむと、案外そこから平凡な安らぎが生まれるものだな、——と例によって、拡大解釈をして、新卒の人の顔をあれこれと思い浮かべて見た。そして、ふとひとのことばかりでなしに、自分自身の道だつて同じようなことだな、と、やつとなじみかけた、園長商売のことも、ふりかえつて見るのであった。

往復一時間を越える空中の旅は、さすがに冷えこんだ。少し下腹が痛むかなと思いつながら、帰りはひとりでゴンドラを占領して、ゆつたりと空のぶらさがりをたのしんだのであった。おれの会社がつくつたんだから、絶対に日本一だ、という次男のことばも、結局は、私をおちつかせた一つの原因になったかと思う。